

学校図書館における電子書籍導入の実践

有山 裕美子 (yumiko_ariyama@sc.kogakuin.ac.jp)

工学院大学附属中学校・高等学校

1. はじめに

工学院大学附属中学校・高等学校（以下、本校）では、2018年5月より、電子図書館システム「OverDrive」を導入し、運用を開始した。本講演では、その導入にいたった経緯や運用方法、また、導入後の生徒の利用状況等について、個人利用、授業活用の両面からその実践例について報告した上で、学校図書館における電子図書館システムの今後の展望、課題等について、読書支援ならびに授業活用に主軸を置きながら報告したい。

本校は、東京都八王子市にある共学の私立学校である。2018年度の生徒数は約1100人、学校図書館は1カ所で、中学生、高校生が共通で利用している。本校では、挑戦・創造・貢献を学校教育目標とし、「何事にも積極的に挑戦し創り上げ、人類や社会、そして生命を育む地球のために貢献できる人間」の育成を目指している。「考える 行う」を柱としたその基本理念においては、教員はすべての授業においてピアインストラクション型講義（PIL）、プロジェクト型学習（PBL）を行うことが求められていて、この学びに対する姿勢は、学校図書館のあり方にも大きく影響している。ICTの活用や、語学の習得にも力を入れていることも特徴で、中学生全員が授業用の個人タブレットを所有し、高校生はBYODを採用するなどICT環境も充実している。またオール・イングリッシュで行われる英語の授業は、中学1年生から実施されている。

2. 導入の経緯

まずは導入の経緯であるが、電子図書館を導入しようと思った理由はいくつかある。一つ目は、校内にICT活用の基盤があったことである。前述したとおり生徒はタブレットやPCを所持しているほか、図書館には貸出用のタブレットやPCが数十台あり、校内は無線LANが完備している。また、私が担当する「デザイン思考」やその他の教科の中でもそれらが積極的に利用されているなど、ICTツールに関しての抵抗が少なく、電子図書館を導入した場合すぐに利用できる環境にあった。これらは、学校図書館に電子書籍を導入する上できっかけとなり得る要因の一つだった。

二つ目の理由は、電子書籍というツールを使って、読書にあまり積極的ではない生徒たちを、読書へ導くことができなかつたか考えたことである。中高生の読書離れを指摘する声を聞くことも多いが、本校でもなかなか図書館で本を借りる生徒が増えないことが悩みの一つである。しかし中高生は、読書にはあまり積極的ではないが、タブレットやスマートフォンを通して、文字には数多く触れている。また、ネット上の投稿サイトなどの小説を読んでいる生徒もいる。そういった生徒たちを、電子書籍というツールを使って、学校図書館の利用者として取り込み、さらに幅広い読書へと導くことができなかつたか。また、紙の本よりもタブレット等の画面の方が文字を追いやすい生徒がいる可能性もある。さらには電子書籍であれば通学途中などの隙間時間での読書に繋がるかもしれない等、デジタルネイティブの生徒たちに、新しいかたちの読書ツールを提供できなかつたか考えたことが、電子図書館を導入しようと考えた二つ目の理由である。

三つ目の理由は、洋書を読みたいという生徒たちのリクエストに応えるためである。本校にはインターナショナルクラスがあり、日本語よりも英語を得意とする生徒が複数いる。本校では語学学習用のリーダーは多数揃えてはいるが、これらの生徒にとっては多読用のリーダーは物足りない状況であった。そういった生徒たちに、読み応えがある洋書を数多く取り揃え、すぐに提供できるOverDriveの仕組みは、電子図書館導入を決定づける大きな要因となった。また、前述したとおりオール・イングリッシュで行われる授業の中では、インターナショナルクラス以外の生徒たちも、より高い英語スキルの習得が求められる。そういった生徒たちのためにも、レベルに応じた洋書の提供は効果的であると考えた。

最後に、授業利用の可能性である。導入を検討する段階で、英語科の教員と話し合ったり、実際に業者による説明会を実施してもらったりした。その際に、授業での活用の可能性を英語科の教員からも提案された。日本語の本も入れば、課題読書の形での活用は国語科等でも可能であるし、同じテキストを短期間複数購入して活用することができれば、さらに授業での可能性は広がるだろう。また洋書における音声読み上げの機能は、ネイティブのきれいな発音で録音されているだけでなく、読み上げ箇所の文字がハイライトされているので、より効果的に学習できるのではないかと感じた。さらには、私の「デザイン思考」の授業の中で、電子書籍を作る授業などを行ってきた経緯もあり、電子書籍の作り手にも読み手にもなることにより、メディア情報リテラシーや、引用、著作権などの問題についても学ぶことができるのではないかと考えたのである。

3. 運用開始前の整備

まずは、運用を開始する上でのルールの確認から始めた。貸出のルールに関しては、より読書に親しんで欲しいと考えて、生徒一人一人に個別のIDを発行、校内外問わず利用できることとした。また、貸出冊数は5冊、貸出期間は2週間と設定した。より利用しやすくなるように、電子図書館を利用する際の個別IDには、学校から提供されている個人番号(学内システムにログインする際のID)と同じものを使用した。

導入にあたっての選書は、洋書を中心にネイティブの教員にも協力してもらいながら行った。特に今までなかなか手が回らなかった語学学習用のリーダー以外の読み応えのある本から選書していった。その一方で、英語の様々なスキルに対応するため、絵本に近いものからできるだけ多様なレベルでの選書も心がけた。OverDriveが提供しているマーケットプレイスと言う選書・購入サイトは、複数のカートを作ることができるなど、使いやすく購入しやすい仕組みである。

また、洋書を中心にとする目的で選んだ電子図書館システムではあるが、和書も一定数ないと生徒たちへ利用を促すことは難しい。できるだけ紙の本とかぶらないように配慮したが、和書は選択肢が少ないこともあり、思うようにいかない点もあった。予算の関係もあり、あまり多くの本を揃えられないこともあり、青空文庫等の安価な本や漫画等も選書に加えたが、導入時に用意できた本は約350冊だった。

利用に際しては、個人IDとPWに、電子図書館ログイン画面のURLをQRコードにしたものを印字したカードを全校生徒に配布した。また、同時に、保護者へのお知らせの手紙と、利用方法を書いた説明書を、日本語と英語で配布した。中学生は全クラス、私の授業の中で実際にログインを行い、貸出方法などを伝えた。また、高校生は、HR担任よりカードの配布および説明を行うようにした。学校図書館にもポスターを掲示、チラシ等も置くようにし、テーブルの上には、カードと同様、QRコードを印字した案内のボードを立て、利用を促すようにした。

4. 電子図書館利用状況と課題

このような経緯を経て、2018年5月の連休明けから電子図書館の利用が本格スタートした。貸出冊数をみると（表1）、貸出開始の5月は、授業の中で利用指導を行ったことや、物珍しさもあったのか、累計で411冊の貸出があった。コンテンツ数自体が350冊程度という中で健闘したとは思ふ。実際に学校図書館内で借りられた冊数と比較しても、それほど開きはしない。しかし、その後6月以降の貸出数を見ると、思うように伸びていないことがわかる。電子図書館利用の周知の難しさや、そもそもなかなか生徒たちを読書に導けない現状が浮き彫りになった形だ。数年前に比べても、貸出数は激減している。図書館利用者数自体はむしろ増加傾向にあるので、学校図書館自体の役割や使われ方の変化もあるが、その点については別の機会にご紹介できればと思う。参考のために授業での利用時数（授業での図書館利用時数）と総入館者数をあげておく。

表1 電子図書館・学校図書館の貸出総数の比較（冊）及び利用状況

	電子図書館	学校図書館	授業利用数（時間）	総入館者数	備考
4月	—	544	47	2411	
5月	411	518	47	2662	電子図書館利用開始
6月	68	535	73	3750	
7月	61	409	18	1252	
8月	154	5	—	—	夏休み
9月	118	344	55	3109	中2 探究マガジン
10月	141	374	92	4205	中2 探究マガジン
11月	66	312	88	4334	
12月	47	273	27	1704	
1月	31	368	66	3394	
2月	117	293	64	3137	中3 NaNoWriMo

その中で注目したい点が、夏休み期間の8月の貸出数である。本校は図書館職員の勤務形態の関係で、夏休みはほぼ休館となってしまうこともあり、実際に本を借りることができない。その中で、インターネットを使って利用できる電子図書館は一定数の貸出数を記録した。学校図書館休館時でも利用できる電子図書館の仕組みは、今後も是非生かしていきたいところである。また、後述する授業での取り組みとリンクした際には、電子図書館での貸出が増えていくことがわかる。

生徒たちの感想等は、実際に来館しないのでなかなかつかみにくい状況ではあるが、感触としては、高校生より中学生の方が多く利用しているように思える。その大きな理由は、中学生全員が授業用のタブレットを所有していることにある。また、すべての生徒に授業内で利用方法を説明したことも大きい。逆に高校生は、スマートフォン等の校内利用が禁止されていることなども手伝って、校内での利用の拡大が望めない。このあたりの校内事情等も、電子図書館普及の一つの鍵となるだろう。常にスマートフォンやタブレット等を携帯する時代に、電子図書館利用に向けて何か新しい形でのアプローチができないか。今後検討していきたいところである。

5. 授業での活用

学校図書館の大きな使命は、「教育課程の展開に寄与する」ことにある。個人利用における読書支援もまたその一つではあるが、可能な限り、授業に取り込める事が望ましい。授業に取り込むことでより多くの生徒の利用に繋がる

ばかりでなく、教員からのアプローチも可能になるからだ。そこで、まずは英語科の授業から紹介したいと思う。前述したとおり、英語科での授業活用を期待しての導入でもあるが、実際に英語科ではどのような形で授業の中に電子図書館を取り入れているのだろうか。

その一例を紹介すると、まずは電子図書館の中の1冊を選んで読む。それを使って、授業の中でビブリオバトル(のようなもの)を開催し、そこで紹介するための原稿をあらかじめ作成し文章化しておいたものを、後にEPUB形式にし、本校の電子図書館にアップロードすると言う授業を展開していた。本を紹介する際には、プロジェクターを使って実際に電子図書館の画面を表示しながら行うことも可能であり、その発表を聞いた生徒がその本を読みたいと思ったときに電子図書館上で予約を入れておけば、返却時に借りることが可能となる仕組みだ。

このように電子図書館で読んだ本の感想を電子書籍にし、さらに電子図書館にアップロードするという取り組みは、紙の本を読んだ後に原稿用紙に読書感想文を書くと言う形によく似ているが、違うのは、書いた文章が誰にでも読まれる形で再提示されることだ。このアウトプットの形は、自分が書いたものに責任が伴う。メディア情報リテラシーを育てる上でも重要である。

英語科においては、自分が書いた作品を電子図書館上にアップロードするという課題にも取り組んだ。この取り組みにおいては、生徒はまずNaNoWriMoと言う英語の小説を書く取り組みに参加し、そこで執筆した作品を電子書籍にし、電子図書館上にアップロードした。2月には完成した作品をお互いに読み合うというイベントも行った。なお、これら一連の取り組みにおいて、EPUBに変換するまでは生徒個人が行い、電子図書館へのアップロードはOverDriveのサポートをいただきながら、教員が行った。

生徒の作品を電子図書館でアップロードするという取り組みは他にも行っていて、たとえば私が担当している「デザイン思考」という授業の中で、中学2年生が課外活動の中で訪れた場所を写真や地図などを使ってレポートした雑誌形式のもの(探究マガジン)を掲載している。雑誌を作る取り組みの延長上で行われているものであるが、電子図書館に自分や友達の作品がアップロードされることは、電子図書館利用への契機にもなり得るのではないかと期待している。また、文芸部の作品も電子書籍にして電子図書館にアップロードした。文芸部では今まで紙で印刷して配付していたのだが、実際に電子図書館の書棚に並んだ自身の作品を見ると、「イラストをカラーで見せることができ嬉しい」あるいは「常にスマホなどで作品を携帯できるので、友人や家族に見せることができ嬉しい」などと感想を口にしていた。なるほどこれらは電子図書館ならではの特徴であり、また、常に自分の作品を携行し、見せることができるという仕掛けは、今後生徒たちが取り組まねばならないポータルフォリオなどに考え方にも共通するものと考えられる。

今後はさらに発展して、学校紹介パンフレットや、教員の独自教材、また高校生の探究論文なども掲載していきたいと考えている。紙で配付しなくてすむ、あるいは常にアクセスできる場所にデータがあるという利点はもちろんのこと、読むためには、当然のことながら電子図書館にアクセスすることになり、こうした取り組みが電子図書館利用や、電子書籍を通しての読書推進に繋がっていけば良いと考えている。その一方で発展途上、あるいは未完成な部分も多い生徒たちの作品を電子図書館にあげていくことには、かなりの躊躇がある。電子図書館では作品として完成したものを精査してあげていきたいと考えているからだ。たとえば探究論文に関しては、引用等も含めてよりその真偽の見極めが求められる。これらについては、最後にもう少し詳しく述べたい。

国語科での授業利用も始めた。私が担当する高校1年生の国語の教材である夏目漱石の『夢十夜』のうち、教科書に収録されている作品が、「第一夜」と「第六夜」だったため、全文を読んで欲しいと思ったことがそのきっかけである。また、授業の流れの中で、他の箇所を紹介したいという場面も出てくるだろう。すでにパブリックドメインとなっている『夢十夜』であれば、もちろん全文ネットで読むことが可能であるが、電子図書館を活用することで、同

じフォーマットで生徒たちに提示することが可能になる。また、図書館で本を借りるように自身の本棚に入れて読むことで、読書をしているという意識が高まる。以前本校で実施した電子書籍に関するアンケートの中で、ネット小説を読むことを読書と認識していない生徒が一定数いたという結果もある。同じ作品を複数購入することで、こうした授業での活用を広げていきたいと考えている。

6. 今後の課題と展望

電子図書館利用については、大きく分けて文学作品や興味関心等に基づいた作品を読む個人利用と、課題等で使われる授業利用との二種類がある。個人利用においては、なかなか定着しにくいこともあり、今後いかに利用を促進していくかを考える必要がある。電子図書館の入り口にどう導くか、図書委員会活動とも連携しながら考えていきたい。ID、PWについても可能であれば学内で利用しているものと共通であるとよい。現在はIDのみ同じものを使用しているが、今後はPWも同様のものが使えることが望ましい。当然のことながら電子図書館の入り口へのアクセスが容易になるからである。

また、利用開始時から、OverDrive側で、「中学生の今、読んでみたい本」、「読書の秋を始めよう」など、工夫した特集棚を用意してくれた。これは電子図書館においてもリアル図書館と同じように特集を組み、宣伝できる仕組みであるが、本来であれば学校側で行うべき業務であり、近いうちにきちんと引き受け、学校図書館として意図を持った特集を組んでいきたいと考えている。そのために重要なのは、やはりコンテンツの充実である。予算的な問題もあるが、OverDriveには、洋書はもちろん、和書の充実も期待したいところである。なお10月20日現在の本校電子図書館蔵書数は570冊、うち洋書が178冊である。

授業での活用については、文学作品がその中心になると考えている。現段階においては、調べ学習等での活用は、JapanKnowledge等のデータベースに敵わないからであり。データベースと電子図書館の役割を切り分けながら、英語科、国語科を中心に授業でも活用を進めていきたい。授業で活用する際には、1冊のライセンス数やその貸出期間等も課題になる。授業に合わせて柔軟に対応できる仕組みが求められるだろう。また、一部の教員から、課題にしたので生徒が確実に読んでいるか履歴を知りたいという要望も上がっている。学校という教育機関ならではの要望であるが、今後検討する必要があるだろう。

電子図書館導入におけるもう一つのメリットは、図書館業務の軽減である。電子図書館であれば、貸出返却の業務や督促の必要性がなくなる。また、棚の整理や排架の必要もなくなり、蔵書が増えてもスペースが足りなくなる心配もない。紛失や汚破損もなくなり、修理の必要性も生じない。ただその一方で、本を手渡す事で行われてきたコミュニケーションの機会が失われ、生徒の読書傾向の把握や、個別の読書指導を行うことが困難になる。また、実体のないものを扱うことというのは、場合によってはその本を利用できなくなる可能性もある。電子図書館、そして紙の本を中心とした図書館、その両者の良さを生かしながら、バランスよく利用していくことが、今後の学校図書館運営における課題となるだろう。

最後に、今回の報告において多数触れた電子図書館への独自資料アップロードだが、これらは本来であれば完成された作品（教員が作成するものも含めて）が掲載されるべきであり、生徒の授業における作品を多数掲載していくことは、電子図書館の本来の役割を超えたものではないかと考えている。たとえ校内のみでの公開であったとしても、そこにはしかるべきハードルがあるべきで、その点においては厳密に切り分けていきたいと考えている。中途半端な作品、あるいは引用を正確に行っていない論文等、そのクオリティの精査については、今後の課題としていきたい。